10. 急性及び慢性腎不全の人工透析について

岐大第1外科　島津　栄一　鈴木　貞夫
岡田　昭紀
泌尿器科　田村　公一

昭和44年10月人工腎室発足以来，昭和45年5月までの6ケ月間に，血液透析を施行した症例は急性腎不全7例，慢性腎不全7例，計14例である．急性腎不全の内4例は術後腎不全であり，慢性腎不全は全例糸球体腎炎である．死亡例はいずれも2例である．

肺浮腫（uremic lung）は腎不全の重篤な合併症であり，透析中にも悩まされる問題であるが，われわれはこれに対し人工腎回路の充填に新鮮血 plasma を用いて血清蛋白を補ない，陰圧を120～160mmHg に保ち水分の除去をはかり，頻回に透析し著効を認めた．

電解質のアンバランスや，不整脈を呈した症例は2～3回の透析により改善され，意識の混濁した症例は1回の透析で正常となる．しかし，前日より尿毒症性昏睡に陥った症例では，第1回目の透析では意識は正常となったが，同夜再び昏睡に陥り，以後毎日の透析で，血液化学的所見は著明に低下したにもかかわらず覚醒することなく死亡した．

第57回岐阜外科集談会

日時：昭和45年7月8日午後5時30分
場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 頭蓋骨膨隆をともなつたクモ膜嚢腫の1例

岐大第2外科
大橋　広文

26才男性，約半年間持続する頭痛を来たした故，某医を受診，頭蓋骨 regio frontotemporalis dextra に丘状の膨隆が存在するのを指摘された．

来院時神経学的に何ら異常所見を認めなかった．一応 Meningioma を疑って開頭術を施行した所，骨膨隆部は正常の1/2程にうすくなった骨がはりだしているのを認めた．硬膜を切開するに，鳩卵大，円盤状の嚢腫が現われた．これを穿刺した所，約4ccの水様性液を排出した．この外膜を切除した所，現われた内膜は肥厚したクモ膜で可成り硬い感じを与えた．この外膜を組織検査した所，著明な瘢痕様肥厚を認めるクモ膜で，原因不明の炎症反応が認められた．よって本症例は頭蓋骨膨隆をともなったクモ膜嚢腫の1例と考え若干の文献的考察を加え報告した．

2. 僧帽弁完全置換の2例

岐大第1外科
下野達宏　小川隆司　馬場瑛逸
村瀬恭一　広瀬光男

私達は，僧帽弁閉鎖不全兼狭窄症に対して完全弁置換術を2例経験し，共に現在経過良好である．

症例1は，34才の主婦である．7年程前より，心悸亢進，顔面浮腫を来していた．心カテ検査で，肺動脈圧は 48mmHg で，ACG 上，左房への造影剤の逆流を認めた．

症例2は，17才の女子で，運動時呼吸困難と心悸亢進である．心カテ検査で，右室圧は，64/－12mmHg，肺動脈圧は，肺動脈圧は68/20mmHgであった．ACG上左房への造影剤の逆流を認めた．

2例共，Kay-Shiley No.8 disc Valve に置換し，症例1は，5ケ月後の現在，経過良好で，CTR は，術後・術前で75.5%→74%，症例2は，1.5ケ月後であるが，基本的日常生活に，支障なく，CTRも，68.8%→62.5% と順調である．人工弁については，最近，同種弁異種弁についても脚光をあびつつあるが，本教室にても，実験中であるが，今後の進展に期待すべきものがある様に思われる．

3. 小児の人工腎透析の経験

岐大人工腎室（第1外科）
島津栄一　鈴木貞雄
岡田昭紀

近年，各地にて血液透析の積極的応用により急性腎不全に対する救命効果が上がっているが小児に於ける急性腎不全は比較的稀であり血液透折自体も非常に困難である．我々が最近経験した感冒治療後薬物性腎不全を来したと思れる4才男児に左大腿動脈，大伏在静

脈に external A-Vshunt を造設し Kiil 型人工腎一層にて血液透析を施行，救命し，shunt 抜去時に大腿動脈を端端吻合し血行再建に成功した本邦最年少と思れる症例を報告し Kolff 型人工腎 single coil にて9才女児の急性腎不全に血液透析を施行し救命した症例を合せて述べ小児の血液透析について shunt 造設部位の検討，血液透析に於いて留意すべき点について言及した．

4. 完全摘出に難渋を極めたCystic Hygromaの1例

岐大第2外科
樫木 良友　堀部　廉

全摘出に難渋を極めた乳児 Cystic hygroma の1例について報告した．

症例は生後35日目の男児，出生時より左耳介部から左下顎部にかけ手拳大の腫瘤に気付く．この時既に腫瘤は口腔底部に波及し，舌の圧排が認められている．生後30日目頃より左頰部へ腫瘤の増大が認められ本科を受診した．腫瘤は左耳介から右下顎部に亘る超成人手拳大の緊満弾性，境界鮮明，波動を認む．基底部の可動性を認めず，レ線像にて喉頭部が腫瘤により圧迫され気道の狭窄化を認む．

手術は気管切開により全身麻酔下に行った．闊頸筋直下に Cyste を認め，周囲組織と瘢痕性に強く癒着し，両側胸鎖乳突筋，舌骨筋群，左外頸動静脈を切断し剝離を進めたが，舌，口腔底部への侵潤，発育が著るしく，全摘は困難であった．術後口腔内の腫脹著るしく，鼻注による feeding，気管カニューレの抜去困難症へと移行し，管理上困難をきたした．

本症例から本症の治療法に就いて検討した．

5. 小児膵外傷の2例

岐大第1外科
関野冒宏　小川隆司
後藤明彦
松波病院外科　和田英一　松波英一
赤座病院外科　牛島康晴

われわれは最近小児の膵皮下損傷を2例経験したので報告する．〔症例1〕8才男子，自転車で通行中転倒しハンドルで腹部を打った．初診時，心窩部に軽度の圧痛あり，翌日には右季肋部に筋性防禦を認めた．

手術所見：胃幽門部小網の挫滅，膵頭部よりの体部に膵のほぼ中央に至る裂傷あり，主膵管の損傷は不明である．ドレナージのみを施行，経過良好であった．

〔症例2〕6才男子，約1m の高さからおもちゃの上に落ち腹部を打った．受傷翌日まで右臍部に軽度の圧痛を認めるのみ，その後筋性防禦を認めた．手術時，血性の腹水及び大網小網の脂肪壊死・膵の血腫を認めたドレナージのみ施行経過良好である．

6. 小児膀胱横紋筋肉腫の1例

岐大泌尿器科
野村　恭博　田村　公一

患者：1年8ヶ月，男，体重 12.5kg

初診：昭和45年4月22日

主訴：下腹部痛，排尿障害と肉眼的血尿

現病歴：約3週間前より上記症状と食欲不振を認めた．

検査所見：血尿，軽度貧血，腎機能障害（PSP 2時間値17%，Urea-N 23mg/dl)，DIP にて両側水腎水尿管．

手術所見：膀胱全摘除術および両側尿管S状腸吻合術．腫瘍の転移は認められなかった．腫瘍は膀胱頸部から前立腺全体および膀胱壁にいたるまで広汎に浸潤していた．

病理組織検査：横紋筋肉腫

7. 甲状腺腫12例の検討（第1報）

岐大第1外科　松浦昭吉
岐阜日赤病院　原　節雄　井戸豊彦

昭和44年5月より1年間の手術症例12例を検討し報告した．Struma nodosa 6例 adenoma 3例Stuma diffusa. thyroiditis 1例であり追跡調査にて変声を訴えるもの3例であった．症例として，51才♀でドケルバン甲状腺炎．45才♂で病理診断てStruma nodosa micro follicularis haemorrhagicaであった．47才♀で Substernal Goiter で Rives の分類で，ⅡBbの範中に入る．44才♀で Struma nodosa で気管狭窄を示し，術後狭窄症状は取れた．我々外科医立場からは積極的に手術すべき事を強調した．

8. 乳癌と妊娠

県立岐阜病院
放射線科　奥　孝行

妊娠4ヶ月に合併した乳癌患者は34才の女で，根治手術と人工流産の処置をうけ，当科で放射線治療を行った．この機会に乳癌と妊娠との関係について，2,3の考察を試みた．

1. 妊娠→乳癌．妊娠回数と乳癌発生率とは逆の相関があり，既婚婦人で妊娠回数0のものも乳癌発生を1とすると，5回以上の妊娠の人は乳癌発生率は0.39となる．又若年期に子宮卵巣摘出術をうけたものではその後の乳癌発生は，うけない人に比し0.25に低下する．

2. 妊娠＝乳癌．妊娠，授乳中の乳癌は一般に予後が悪いとされるが，妊娠各期によって予後は異なり，妊娠後半に処置をうけたものゝ予後がもっとも悪い．従って妊娠後半に発見された乳癌は，分娩後に手術を行った方がよい．

3. 乳癌→妊娠．乳癌治療後の妊娠は予後に対していゝ影響がある．但し，体内に癌病巣が全くないことが必要条件である．

9. 肺結核と誤診された肺癌の1例について

国立療養所岐阜病院
井上律子　小林君美　加藤康夫
松本守海　浅野　靖

われわれは，最近，その比較的初期に空洞を形成し，そのために肺結核と誤診されて約1ヵ年半治療されていた肺癌の1例を経験したので報告する．

患者は53才の女子で，集団検診で右肺上野にやゝ結節状の異常陰影を発見され，4ヵ月後には，外径1.6×1.2cm，内径1×0.8cmの空洞が認められるようになった．抗結核剤が用いられたが著効なく，喀血があり空洞も拡大して，外科療法の目的で本院へ入院．昭和45年2月12日に右上葉切除術を行ない，肺癌と診断された．

肺癌症例が増加している今日，高年令者においては，肺野に異常陰影を発見したような場合，一応肺癌を疑い，肺癌の確定診断がくだせないような症例においても肺癌でないという積極的な根拠のない場合には，ちゅうちょなく，可及的早期に手術にふみきるべきであると考える．

10. 直腸奇形腫の1例

岐大第2外科
○佐治董豊　田中正雄

極めて稀れな直腸奇形腫の1例を報告した．

症例：52才♀　主訴：下痢及び血便，既往歴：32才の時，子宮筋腫のため子宮全剔術を受けたことあり．家族歴：特記すべきもものなし．

現病歴：昭和45年2月中旬，下痢を来し，4日後より下腹部不快感とともに鮮紅色の血便を見た．同様の症状が3月上旬，4月上旬にもあったゝめ5月13日来院した．

現症：全身的には特記すべき異常所見を認めず，直腸指診，直腸鏡，及びバリウム注腸X線検査にて，肛門より7～10cm口側の前壁に，くる実大の弾性硬のポリープ様腫瘤あり腫瘤を含めて直腸の切除術を施行して，Babcock & Baconの肛門括約筋保存術式の変法を行った．腫瘤は肛門より10cm口側の直腸前壁にあり，小指頭大のポリープと，クル実大の腫瘤が融合しており，表面平滑で淡白色，一部に毛髪を有し，割面に骨組織を認めた．病理組織学的に，三胚葉性の奇形腫であった．

これについて若干の文献的考察をも行った．

11. 胃及び十二指腸迷入膵の1例

岐阜市民病院外科　三沢恵一

症例　36才女子

主訴．心窩部痛．半年前より軽度の心窩部痛，腹部膨満感あり，某医にて胃透視，ファイバースコープを行い，胃粘膜下腫瘍の診断のもとに，当科に紹介され手術を行った．入院時全身所見，腹部所見，及び一般臨床検査所見に異常は認めず．

腫瘍は胃前庭部後壁に2.0×1.5×0.5cm．更に十二指腸起始部に大豆大の腫瘍あり．共に弾性硬，境界鮮明で表面は正常粘膜で被覆されていた．

手術は十二指腸の腫瘍も含めて胃切除術を行った．

織組織学には，胃の腫瘍がHeinrichの迷入膵分類によるI型のもので，十二指腸の腫瘍はIII型のものであった．